手の效用

橘　覺勝

オートメーションで一騒ぎした世間は，また人工衛星の出現でさわぎだした．実に科学の世界はめまぐるしいことではある．しかしオートメーションといえども人間が工夫した仕掛けであり，原子爆弾にしても，誘導弾にしても，人工衛星にしても人間の頭でつくつたものにちがいない．頭で考案し，工夫し，企画したものを人間の手が直接つくつたのである．手がなければなにものもつくれない．手の技術なくしてなんの生産もありえないではないか．そういうことは自明の事実で，いまさらなにをいうかといわれるにちがいないが，それは承知のうえのことだ．知つておればいう必要はないじやないかとまた詰めよられるかも知れない．それをしもあえてここにいう所以はとわたくしもひらきなおるのである．

実際われわれは日頃ほとんど手を思いだすことがないのではないか．指がさす月はみるが，さす指はまつたく忘れているという日常ではないであろうか．

わたくしはまず次のようなテーゼをかかげて，自分の手をふりかえつてみた．「人間ははたらく手をもつて生れ，そして手は人間の文化を創造し，人間の歴史は手の活動によつてつらぬかれている」と．まことに手は普遍器官であり，心の直接器官であり，また外部の脳髄であるがゆえに，人間の文化を創造し，人類の歴史を製作することができるのである．しかしまだそれだけでは十分でない．Spengler は“「眼の思惟」はただ事象の原因と結果とを探求するにすぎないが，「手の思惟」は手段と目的とを追求する”といつたことを思いだす必要がある．ここにこそ手が文化をそして歴史を創造するといわれる所以があきらかになるからである．

ちよつとひねくつたようなことをいつたが，あの男がかくとこれだから困るんだといわれるにちがいない．なる程“手の思惟は手段と目的とを追求する”ということをもつとパラフレイズする必要がある．つまり手はそれ自身道具であると同時に，道具をつくつた道具ででもある．道具の誕生は生物の器官投射すなわち器官の代用，延長，模写，補強，発展にありと Kapp はいうというところに．手段―目的という実用的な思惟があり，その道具をもつて自然を加工するところに文化の創造と歴史の発展を約束した契機があると解釈すれば，なる程なと合点がいくであろう．

けだしはたらく手は，素手というよりも道具を必要とし，技術する手は機械工具を必要とすることは生産技術の面で明々白々であろうが，機械のもつギゴチなさ，その部分部分がそれぞれ固定した方向にしかうごかないこと，そして機械の生産品がその形からみてあきらかに一定の限界をしめすというようなことは，人間の手の万能ともいうべき自由自在さにくらべてくらべものにならないということを考えさせるのである，ほんとに手というものは器用なものであり，こまやかな道具だといいたいのである．こんなことをいうと産業革命を知らず，人間の失業も知らない“たわけ者め”とどなられるにちがいない．しかしいかに怒鳴られようともわれわれの手のほんとのすがたを思いだしてほしいのである．

そのむかしアナキサゴラスが“人は手をもつがゆえに知性的である”といい，アリストテレスが“人はもつとも賢きものであるゆえに手をもつ”といつた．われわれは homo faber であるとともに homo sapiens でなければならない．技術人とすることが勿論手の効用をみとめることによつて可能であるとともに，理性人たることもかならず手をもつ必要があるのである．手は技術すると同時に思惟するのである．道具や機械が手の思惟によつてつくられると同時に，手の技術によつて使用されることを忘れないでほしい．（筆者は大阪大学文学部教授）